

2023 年 11 月 25 日 (土) 午後 2 時-4 時

発表 四宮こころ

朗読 松田 有美

われは堅き金剛石
鎚によりても鑿によりても
折ることなし。
打て、打て、打て、われを。
されどわれは死なじ。

われは不死鳥のごとし
己れの死より再びいのちを得
己れの灰の中よりよみがえらん。
殺せ、殺せ、殺せ、われを。
されどわれは死なじ。

(ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ 1532-1589) の詩

作曲の仕事の中に彼は或る一本調子な幸福感を楽しく味わっていた。彼の生涯のこの時期に、芸術は彼が巧妙に演奏することのできる一つの楽器にほかならなかった。彼は自分がディレクタントになっていくという恥ずかしさを感じていた。

「芸術の道を歩き抜くためには」とイプセンは言った—「生まれつきの天才力だけでは足りない。芸術家の生を満たしてその生に一つの意義を与えるような、いろいろの情熱の受難と苦悩とが必要である。そうでなければ、本をいくら書いたところで芸術創造ということはなされないで終わる。」

※イプセン：ノルウェーの劇作家 (1828-1906)

※ロマン・ロラン『民衆芸術論』

「初版序文／大杉栄訳」

平民劇は流行の商品ではない。ディレクタント等の遊びではない。

新しき社会のやむにやまれぬ表現である。その言葉である。そしてまた、危険の際の自然の勢いとして、凋落しかかっている老衰した旧社会に対する、戦いの機関である。

少しでも曖昧であってはならない。ただ題目のみが新しい、新しい旧劇、すなわち民衆劇の名のもとに変化を求めんとする紳士劇を演ることではない。平民から出た平民のための劇を起すのだ。新しき世界のための新しき芸術を建設するのだ。

朗読① みすず書房 8頁上段～9ページ下段

オリヴィエの住居は彼にとって家庭ではなかった。それは過去のいろいろなまぼろしの棲家であるような暗い室であり、そしてその室の暗さが濃く、その室の侘しさが大きければそれだけますます、オリヴィエの心のまぼろしははっきりとした姿をとるのだった。

「気の毒なルッサン家の人々」がどんな人々なのかさえ、オリヴィエは知らなかった。父と母とそして5人の子らの労働者の家族が、生活苦のためにそのアパートで自殺したことを聞き知った。

朗読② みすず書房 11頁上段～12ページ下段

自分と姉とが心身をすり減らしてその日その日に生きる権利を手に入れようと努力し、しかもその努力が成功するかどうかもまるで分らなかったあの頃のみじめな数年間の記憶を急いで忘れ去ろうとした。それらの思い出のまぼろしのかずかずが、自分の恋のエゴイズムを彼が後生大事に取り留めようとはもはやしなくなった現在に、再びオリヴィエの心に浮かび上がってきた。苦悩の姿から逃れようとするかわりに、彼はむしろそれを求め始めた。

「幸福だって！こんなにもおびただしい苦悩のありさまが見えているときに、どうして平然と幸福でいられようか？幸福であることができるのであれば、それはただ、人々の悩みを減らそうと努めることの幸福しかありえない」

「一善良で向こう見ずな君たちフランス人は、常に率先してあらゆる不正義に向かって一スペインのあるいはロシアの不正義に向かって抗議を声明することが、ことらの真相がまだよく判りもしないうちにそれをする。僕が君たちフランス人を好きなのはそのためだ。しかし、それによって君たちはそのことらを前方に推し進めているつもりなのか？君たちは騒ぎの中へ飛び込む。そして効果はゼロだ。ことによるとゼロ以下だ・・・」

他人に日光をそそぎかけるためには、自分の心に太陽をもっていなければならない。オリヴィエにはそれが欠けていた。今日の最良の人々がそうであるように、彼は自力だけで力のかぎやきを内から外へ照らしただけ充分に強くなかった。彼にそれができるとすれば他の人々と協力することによってのみできたであろう。しかしどんな人々と協力するのか？知性が自由で心情が宗教的であるオリヴィエは、政治的な、また宗教的などの党派にも容れられなかった。それらの党派はいずれも、不寛容と偏狭とを競っていた。それらのどこかで勢力を確保するやいなや、勢力の乱用が行われた。厭迫されている人々だけがオリヴィエの心を惹きつけた。

当時、社会問題は、社交的な場所で取り上げられる一問題となっていた。社交の客間で。小説の中で、舞室で、それが論じられていた。誰しもがその問題を心得ている振りをしていた。一部の青年たちは、彼らの最良のエネルギーをこの問題のためだけに使っていた。

どの新しい世代も、かならず或る一つの美しい狂気を必要とする。若い人々の最も利己主義的な人々でさえ、満ち溢れる生命をもっており、不生産なままではありたくないとのぞむエネルギーの資本をもっている。彼らはそれを。一つの行動において、もしくは一つの理論において使用しようとする。

風が大気の中に、たくさんの不正義のこだまを運んできた！・・・不正義は数えきれないほどある。一つの不正義を治療しようとして、そのためにまた別の色々な不正義の原因となるような行為がなされる。思想観念が単に思想観念であるあいだは決して世界を征服することはないが、それらが力をなるときに世界を征服する。それらが人々を掴むのは、それらのもつ知的内容によってではなく、歴史の一定の時期にそれらの思想観念からほとぼる生命力の放射によってである。この上なく崇高な観念でも、それが感染力をもつまではまったく無効果のままにいるし、その思想の感染力は、その観念的価値によるというよりも、その観念を具体化して血液をそそぎこむ人間的集団（グループ）の価値によって発揮される。

朗読③ みすず書房 16 頁下段～17 頁上段

それらを民衆がつかむやいなや、民衆はそれらの考えを普及した。民衆はそれらに、民衆の熱っぽい現実性をつけ加えた。そのために、それらの思想はいびつにされたが、しかし生きづけられて、抽象的な思想としての条理の中を、民衆の幻覚的な希望の夢が、砂漠の熱風のように吹きわたった。

8月4日の夜に自分たちの特権を断念したフランスの特権者たちのいさぎよさを人々は祝福する。私は想像するのだが、彼のうちかなり多数の人々は、自分の邸宅に帰ってからこんな独り言をいったのではあるまいか—「何てことをおれはしたんだろう？おれは酔っぱらってたんだ！」ああ！立派な酩酊！そんな酔いごちを与える芳醇な葡萄酒と葡萄の樹とに祝福あれだ！

オリヴィエの世代の若いブルジョワたちの頭脳を酔わせた酒は一層きつい味のものだが、酔わせる力はやはりつよかった。彼らは、自分たちの階級を、新しい神「未知の神」へ—「民衆」へ—犠牲に供した。